

Krishna Sen and  
Maila Stivens eds.,

*Gender and Power in Affluent Asia.*

London: Routledge, 1998, xiv + 323 pp.

瀬地山 角

I はじめに

本書はアジア経済の急激な成長に伴って、それぞれの社会で登場してきた新しい生活様式をジェンダーの観点から捉え返した論文集である。この本はラウトレッジ社の *The New Rich in Asia* シリーズの一冊であり、そうしたアジアの新興経済に対する欧米の関心を色濃く反映したものといえるだろう。

経済成長はそれぞれの社会で中間層<sup>(注1)</sup>を大量に生み出していく。これは経済的な意味にとどまらず、社会の中に特定のライフスタイルを持つ層を生み出していくことを意味している。すなわち一夫一婦制のような特定の性規範、電化製品の購入など特定の消費行動に特徴づけられる一貫した生活様式といったものが、経済成長に随伴して生まれていくのであり、こうした変化がジェンダーのあり方に与える影響には、大変大きなものがある。元来主婦という労働力再生産の専従者が誕生したのは、産業革命を通じて中間層が生まれたことと対応していた。そして東アジアでも経済発展を通じて主婦の誕生が進んでいる<sup>(注2)</sup>。本書が対象とするような社会における中間層の成立とジェンダーのあり方の変化が、欧米や北東アジアのそれとどう異なるのか、といった関心から読むこともできるだろう。

本書のひとつの特色はその執筆陣の地理的「偏り」にあるといえるかもしれない。編者の1人クリシュナ・センはオーストラリア南西部、パースにあるマードック大学の教員。もう1人のメイラ・スティー

ヴンスは、メルボルン大学。他の執筆者も第5章担当の1人がシンガポール国立大学の教員であるのを除けば、すべてオーストラリアの大学に勤めている。

次にあげる章立てを見れば一目瞭然なのだが、本書で豊かなアジア (affluent Asia) というときに対象となっているのは、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ベトナムなどのいわゆる東南アジアの社会で、これに中国が加えられている。つまり韓国、台湾といった東アジアの諸社会が対象となっていないのだが、これはオーストラリアからアジアを見ているという事情と関係している。自らの普遍性を固く信じる西側民主主義の観点から「アジア的」なるものが論じられているという意味では、欧米型の視点であることに変わりはないものの、オーストラリアを起点とする遠近法から見えるアジアの地図といったものを感じ取ることもできる。

II 概 要

まず章立てと執筆者は以下のとおりである。

- 第1章 豊かなアジアにおけるジェンダー、権力、モダニティを理論化する  
(Maila Stivens)
- 第2章 インドネシア女性と仕事  
(Krishna Sen)
- 第3章 インドネシアの炭坑町での愛と性  
(Kathryn Robinson)
- 第4章 セックス、ジェンダーと新しいマレー人中産階級の形成  
(Maila Stivens)
- 第5章 追従と抵抗の間で——シンガポールの女性と中産階級の生活様式  
(Nirmala PuruShotam)
- 第6章 花瓶と主婦——改革開放時代の中国における女性と消費  
(Beverley Hooper)
- 第7章 中国における文化的復古主義——揚子江デルタ地域における変わりゆくジェンダー  
(Anne E. McLaren)
- 第8章 ドイモイ (改革) 時代のベトナム女性  
(Stephanie Fahey)

第9章 「孝行娘」、疎遠な姉妹——タイの女性  
(Nerida Cook)

第10章 戦後フィリピン政治とジェンダー  
(Mina Roces)

次に各章の内容について、簡単に要約をしておかなければならない。

第1章では、各章の紹介の議論が簡単に紹介されるとともに、中心となるような論点があらかじめ提出されている。この手の論文集の常で、どうしても論点にはばらつきが生じ、議論の対象においても深さにおいても、一貫した構成のものにはなり得ないが、それでもいくつかの論文に通底するような論点が提出されている。

その中でもっとも重要なものは、中間層の形成とジェンダーという普遍的な問題設定の中で、「豊かなアジア」を対象とすることによって、どういった新しい問題を発見できるか、というポイントである。これは敷衍すれば、ナショナリズムとジェンダー、もしくはフェミニズムと地域文化の独自性といった非常に大きな論点へとつながっていく。本書の提起するもっとも大きな議論の焦点である。

第2章はインドネシア中間層の家族観や女性像が紹介されている。ここで特徴的なことは中間層の象徴的な女性像が、必ずしも主婦だけではなく専門職などで働く女性である場合も多い点である。購買力のある豊かな中間層を対象とした雑誌の広告などでは、しばしば働く女性がイメージとして挙げられていることが紹介されている。

こうした「働く女性」というイメージは、第4章のマレーシア、第5章のシンガポールなど他の東南アジアの社会にも共通するポイントであり、重要な論点であろう(後述)。

第3章では、インドネシアの近代化と「新秩序」の確立に伴って、ロマンティック・ラブと恋愛結婚(⇒見合い結婚)や、特定の性役割分業といった生活様式が広がっていく様子を、スラウェシ島の街をベースに描いている。

第4章のマレーシアの中間層をめぐる議論でも、働く女性と主婦という2つのイメージが出てくる点

は、インドネシアと同じである。ところがそうしたキャリア女性の登場が、欧米化という文脈では捉えられず、むしろそれを避けて、ムスリムやマレーといった伝統的な価値観が強調されている点が大変興味深い。つまり、中間層の価値観として、個人主義や性的自由を排して、イスラム的な価値を守ろうとする志向性が強く見られるのである。

第5章のシンガポールでも中心的な課題は同様である。シンガポールでは、女性の労働力化は非常に盛んである一方で、中間層の結婚や出産を奨励するなどの露骨な「家族支援政策」がとられている。家族の欧米化(個人化・アトム化)はここでも避けられるべきものと考えられているのである。

第6章・第7章はいずれも改革開放以降の中国を扱っている。第6章は女性像の変容がテーマ。文革期までの化粧気がなく、人民服姿で肉体労働にも従事する「新しい女性」から電化製品に囲まれた女性的なイメージへの急激な変容を広告写真などで跡づけている。第7章は改革開放で豊かになった地域で、葬式の泣き女などかつては封建的と否定された慣習が復活している様子を描いている。近代化と家族をめぐるかなり大きな論点がここには隠されている(後述)。

第8章はドイモイ以後のベトナム女性の状況に関する議論である。社会主義社会における計画経済から市場経済への移行は、多くの場合女性に厳しい環境を強いることになる。企業がより採算重視へと傾くことによって、託児所などのコストがかかる女子労働力を敬遠し始めるからである。ベトナムでも例外ではなく、国営企業の職を失ったものの6、7割が女性であるといったデータが示されている。しかしそれが必ずしも極端な生活に直結しない点が、ベトナムの興味深いところで、街角の小商人となったり、ビジネスを起こしたりといった形で生計を立てる。母子家庭が必ずしも貧困ではないという指摘も父系中心の北東アジアでは考えにくい事態であり、興味深い。

第9章はタイの北部農村出身の売春女性の問題に関する手際の良い整理となっている。自由主義的なセックスワーカー論では捉えきれないことを主張す

る一方、返す刀でタイの中間層主導の反売春論が、売春女性たちのリアリティからは遠いものとなってしまっていることを指摘している。

第10章はフィリピンの戦後政治の中で、女性は決して単に排除されてきたのではなく、権力を握る男性のネットワークに入ることを通じて、それなりの権力を行使してきたことを例証している。

### III いくつかの論点について

この手の論文集の常で、本書も収録されたすべての文章が厳密な意味で問題意識を共有して、それぞれの社会を分析したという形の論文の集合体ではない。ただ確かに豊かになりつつある東南アジアの中で、勃興しつつある中間層、その特定の消費行動、家族規範、性意識といった共通のセッティングが、これらの論文の通奏低音を形成していることは間違いない。さらにいくつかの章では、かなり共通の問題点が提示されている。以下ではそれらについて簡単に触れておくこととしよう。

まずひとつ目は、東南アジアにおける中間層女性の労働力化という問題である。先に述べたように、産業革命期に欧米で労働者階級の生活水準が顕著に上昇した時期、また父系社会の北東アジアで経済成長とともに中産階級が勃興した時期は、同時にその層で女性が非労働力化し、主婦が誕生した時代であった<sup>(注3)</sup>。これに対して、東南アジアの諸社会では、もちろん「主婦の誕生」も起きるものの、きわめて短期間の間に近代的セクターで働く女性の数が増え、一定の層を形成する。第2～5章はこうした事例を扱ったものであり、第8章のベトナムの例もある意味では似たような現象と言いうるかもしれない。これらはもちろん国内の非常に大きな階層格差とそれに伴う安価な家事使用人の存在によって支えられたものである<sup>(注4)</sup>。

しかし産業革命期や高度成長期の初期には、欧米や東アジアでも家事使用人はそれほど高価ではなく、ある程度は利用可能であったことを考えれば、こうした東南アジア型の解決は、必ずしも階層差によってのみ説明できるような事態ではない。日本でも外

国人の家事使用人が普及するといった可能性はあり得たはずだし、それが言葉の問題によって遮られるのだとしたら、韓国で中国の朝鮮族の女性が家事使用人になる、といった事態も可能性としては考えられるはずなのである。それが起きないということは、そもそも既婚女性に対する役割期待に文化的な違いがある可能性があるのだ。第2～5章までに散見されるこれらの社会での母役割への相対的な関心の薄さは、そうした問題と関係するかもしれない。

2点目に、このことと関係するが、こうした現象が欧米的なキャリア女性の誕生とは様相を異にしているという点は大変興味深い。東南アジアでは、家族規範のレベルでの欧米化は、強く忌避されている。その際に最も強い懸念の対象となるのは、離婚の増大や性規範の弛緩といった現象である。つまりこれらの社会は女性の社会進出を認めながらも、家族が個人化したり、自由主義が強まるといったことには概して否定的で、強い家族的絆といったものを価値として維持し続けようとしている。これはちょうど台湾の社会で、高学歴女性が労働力化した場合、それを祖父母の世代が孫の面倒を見るという形で支える、という現象と対応している。中国でもその傾向が見られるが、女性の労働力化が必ずしも強い個人主義を背景としない、という事例であると考えられることができるだろう。

3点目は、ナショナリズムに絡む近代化と家族の関係に関してである。第7章では、中国の事例に則して、かつての「封建的な」伝統が復活してくる様子が述べられているが、これは、「欧米化」に抗しながらいかに「新しい家族」を構想するかという、日本を含めて全ての後発国が直面する課題とつながっている。北東アジアの事例でいうと、自らの手で自らの伝統を否定する前に日本帝国主義によって「近代」がもたらされてしまった韓国の場合には、戦後の家族観は「固有の美風」を守ることを基調にせざるを得なかった。ナショナリズムの核に伝統家族が滑り込むのである。これに対して五四運動などを通じて、自分の伝統を自分で否定することのできた中国の場合は、伝統の否定こそが政策の核となることができた。これはイスラムでいえば、イランの

ような原理主義を採用する社会と、トルコのように早い時期に自前の近代化を行った社会との違いに対応しているかもしれない。

もちろんどんな社会も自国の伝統から完全に自由ではあり得ない。中国の「伝統復古」はそれを物語っているだろう。しかし家族の欧米化を厭う東南アジアや中国も、徐々に婚姻や性に関する自由主義の圧力を経験するに違いない。そのときの対応は伝統とナショナリズムの関係をめぐるひとつの試金石になるだろう。

1997年秋以降のアジアの経済危機は、飛ぶ鳥を落とす勢いだった東アジアの経済発展に冷や水を浴びせかけるような形になった。しかしアジア太平洋地域が世界の成長の中心として注目すべき存在であるという意味では、今後もその重要性が減じることは

ないであろう。出版は1998年の早い時期だったため、議論の中には最近の経済危機の問題は織り込まれてはいない。しかし大きな構図としては、そのことは本書の魅力をそぐものにはなっていない。

(注1) 中間層という日本語は“middle class”に対応している。

(注2) これについては拙著『東アジアの家父長制』(勁草書房 1996年)で詳細に論じている。

(注3) 中国南方系の社会をベースとする台湾・香港は、その意味では北東アジアの中では例外的といえるかもしれない。

(注4) 言うまでもないことだが、香港・シンガポールの場合はこれがフィリピン出身者を中心とする外国人のメードによって支えられている。

(東京大学大学院総合文化研究科助教授)